

千葉 力 先生 追悼文

我が国の新生児医療の黎明期に、苦楽を共にして現在の世界最高水準に導いた、新生児成育医学会功労会員の千葉 力先生が、本年4月18日に満75歳でご逝去されました。

千葉先生とは年齢もほぼ同じで、多くの思い出深い交流を持つことが出来た「よしみ」から、個人的な内容となりますが千葉先生の追悼を述べさせていただきます。

千葉 力（ちから）先生は1941年12月15日に宮城県名取市でお生まれになり、仙台第二高等学校を経て弘前大学医学部を1967年に卒業され、直ちに横須賀米軍海軍病院にてインターンをされました。この米軍病院での1年間の経験に関しては、口数の少ない先生故、多くの方々には意外とも思うかもしれませんが、ご子息（千葉 大、内科医）に送られた手紙に垣間見る如く、千葉先生の医師としても大きなバックボーンとなっていたようです。その手紙には、「英語がいかに大切であるかを知り世界に通用する医学を学ぶことと「臨床医の生涯学習法」として先人の蓄積した医学を出来るだけ読んで理解し習得しさらに自分の経験を加える」などが、父親としてより先輩医師として諭すようにかかわれていました。さらに多くの医学雑誌や文献について説明し、さらに驚くことに世界的に有名な内科教科書のハリソンとセシルの違いや利用の仕方を説明しているのです。小児科医のそれも新生児に特化した千葉先生が、それほど広い素養を持っていることに自分が恥ずかしくなる思いでした。

その後、大学に戻り千葉先生は博士課程で学究生活も経験され1972年に医学博士号を取得されています。このことも小生を含め多くの仲間が、新生児医療に没頭している千葉先生の姿から臨床一筋の印象をもっていました。思い返せば折に触れての会話に多くの論文を読み込んでいる深い知識と造詣を滲ませていました。ご家族のエピソードで、千葉先生の書齋が余りに医学書や文献で乱雑なので片付けようとして「俺の本に触るな」と叱られたのが初めて聴く千葉先生の怒鳴り声であったそうです。私が知った口を利くのを、千葉先生は自分でも知っていながらニコニコしながら聴いていたのでは、と思うと恥ずかしくなる思いです。

その後の千葉先生の活躍で特筆されるべきは、1976年青森市民病院小児科部長となられ、青森県に最初のNICUを開設し1985年から2007年までの22年間その専任新生児科医として、文字どおり地域のさらに日本の新生児医療の発展に身を捧げるお仕事振りでした。小生が開設間もないそのNICUを訪れた時、当時の女子医大より一回りも大きなNICUの中を小柄な千葉先生が走るように保育器と保育器の間を回診している姿が忘れ難く、「先生、ローラースケートを履いて回診したら」と冗談を言ったことを思い出します。

学会や新生児医療連絡会を介しての交流を超えて、小生が千葉先生と個人的な絆を深めたのは、1985年に青森市民病院新築に際しNICUを開設することになり、その準備期間中に3ヶ月ほど、同様に開設早々であった女子医大NICUに実際の臨床や運営の視察を兼ねて、なんとスタッフ同様に臨床に従事して下さった時です。その決して相手にプレッシャーを掛けない優しい人柄から、直ぐみんなと溶け込み、当時ナースを含めて40人以上はいるスタッフ全員の名前を1~2週間で覚え、名前を覚えるのが苦手な小生がみんなのジョークのネタにされてしまうエピソードがありました。かつて病棟で千葉先生と働いたことのある山田多佳子は、両親から見放されてフランスに里子になっていった超未熟児を千葉先生が受け持ったことを30年以上も前なのに記憶にあると言っていますが、それほど千葉先生の真摯な医師としての姿であったからなのでしょう。

千葉先生は2007年40年余勤務した我が家のような青森市民病院を定年退職し、公立野辺地病院小児科嘱託医として新生児を超えた地域小児科医療に従事し、変わらぬ子供と母親への優しさに溢れた医療を行い2017年3月31日に、ご家族に「野辺地でやり残したことはない」と言って退職されたとのこと。4月から最後の奉公となる三沢中央病院院長に就任されましたが、その後僅か1ヶ月も経たずに亡くなられたことは残念ですが、ご家族から見せていただいた千葉先生の元患者であった子供たちの家族から寄せられた数々の手紙を読ませていただくにつれ、まさに医師として悔いのない人生であったのではないかと感じております。それらの手紙は、異口同音にいかに千葉先生が心の底から子供と家族に寄り添った医療をされていたかを物語っていました。

最後に、この追悼文を書かせていただいたことから、千葉先生のような素晴らしい新生児医療に生きた仲間と時間を共有できた幸せに感謝しています。改めて、千葉先生ごくろうさまでした。

ニコニコと 口ごもりたる 物言いの 影より出る 英知の光

腰痛の 我を背負いて ぎこちなく 宴会場に 君は歩めり

2017年6月1日

共に新生児医療に生きてきた仲間の一人
仁志田博司